

女子短大生の社会人基礎力に関する報告

武 藤 玲 路

Report on Fundamental Ability of Women's Junior College Students

Ryoji MUTO

キーワード：社会人基礎力、基礎能力、職業興味、就職活動、学修行動

1. 背景と目的

経済産業省は2006年に「社会人基礎力」について、同省のホームページ上で次のように提唱している。「“社会人基礎力”とは、“前に踏み出す力”“考え抜く力”“チームで働く力”の3つの能力（12の能力要素）から構成されており、“職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力”である。企業や若者を取り巻く環境変化により、“基礎学力”“専門知識”に加え、それらをうまく活用していくための“社会人基礎力”を意識的に育成していくことが今まで以上に重要となってきた。また、文部科学省は2011年の中教審答申の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」¹⁾において、「現実の社会で生き、社会をつくる人間が有する資質・能力という観点や職場等で求められる能力という観点等から、人間力、社会人基礎力、就職基礎能力等の考え方が提案さら、このような能力の育成に企業や学校が取り組んでいる例も見られる。」ことを報告している。

一方、文部科学省は2012年の中教審答申の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」²⁾において、「(前略) プログラム共通の考え方や尺度（アセスメント・ポリシー）に則った成果の評価、その結果を踏まえたプログラムの改善・進化という一連の改革サイクルが機能する全学的な教学マネジメントの確立を図る。学長を中心とするチームは、学位授与の方針、教育課程の編成・

実施の方針、学修の成果に係る評価等の基準について、改革サイクルの確立という観点から相互に関連付けた情報発信に努める。特に、成果の評価に当たっては、学修時間の把握といった学修行動調査やアセスメント・テスト（学修到達度調査）、ルーブリック、学修ポートフォリオ等、どのような具体的な測定手法を用いたかを併せて明確にする。」必要性を唱えている。さらに、文部科学省は2016年に「3つのポリシーの策定及び運用に関するガイドライン」³⁾において次のように提唱している。それは、「各大学においては、大学教育を通じて“学生が何を身に付けたか”という観点を重視して個々の学生の学修成果の把握・評価を行い、どのような評価の基準や方法に基づき大学として卒業を認定し、学位を授与したかについての説明責任を果たせるようにすることが求められる。そのために、例えば以下のような点に留意して取り組むことが考えられる。①学修成果の具体的な把握・評価方法（ルーブリック、アセスメント・テストのような直接的方法、学修行動調査のような間接的方法等）、より効果的な公示方法等の開発・実践。②学修ポートフォリオの活用など個々の学生による学修履歴の記録、振り返り、学修デザインの支援。」というものである。

このように、文部科学省はこれからの大学教育において、専門的能力の基礎・基盤となる「社会人基礎力や就職基礎能力のような汎用的能力」の重要性を唱えている。また、教育の質保証のため

の学修成果の根拠資料として、「社会人基礎力を診断するアセスメント・テスト」のような直接的な方法と「学修時間の把握といった学修行動調査」のような間接的な方法の必要性を提唱している。さらに、今後の短大教育のアセスメント・ポリシーの策定及び運用において、社会人基礎力や就職基礎能力を診断・査定する外部の標準化されたアセスメント・テストの導入は、短期大学のキャリア教育・職業教育を客観的・系統的に評価する指標として、妥当性と信頼性が高いものとして評価できる。

本稿は以上の点を踏まえ、短大教育における汎用的能力の重要性を検証するために、女子短大生の社会人基礎力と基礎能力、職業興味、就職活動、学修行動を測定し、社会人基礎力の能力差が他の能力等に与える影響について検討することを目的とした。

2. 方 法

2.1 調査対象・時期・場所

①アセスメント・テスト

九州地区の短期大学の2015年度入学生2年女子173名を対象として、2016年8月上旬に、学生が在籍する短期大学の普通教室で実施した。

②学生調査

九州地区の短期大学の2015年度入学生1年女子181名を対象として、2015年11月下旬に、学生が在籍する短期大学のPC教室で実施した。

2.2 調査項目

①アセスメント・テスト

実務教育出版が作成した「社会人基礎力・職業適性診断(キャリアステップ)2016年度版」の「社会人基礎力」「基礎能力」「職業興味」「就職活動」に関する設問を使用した。

②学生調査

短期大学コンソーシアム九州(JCCK)が開発した「共同教学IRネットワークシステム2015年度版」の「学修行動」に関する設問を

使用した。

2.3 調査手順

①アセスメント・テスト

マークシートによる検査で、「社会人基礎力」「基礎能力」「職業興味」「就職活動」の順に実施した。所要時間は説明を含めて約90分間であった。

②学生調査

PCによるWeb調査システムを用い、学生による5段階の自己評価で実施した。所要時間はPCの起動及び説明を含めて約30分間であった。

2.4 結果の処理

①アセスメント・テスト

「社会人基礎力」「基礎能力」「職業興味」「就職活動」とともにテストの妥当性と信頼性が統計的に検証しており、5段階評価の出現比率(7%、24%、38%、24%、7%)に近似する形で、素点から段階点への換算基準が設定してある。

②学生調査

「学修行動」の中の学修時間に関する項目は平均時間を算出し、他の学修行動の項目は行動特性を5段階評価した平均値を算出した。

③社会人基礎力の能力別比較

全学生173名の社会人基礎力の総合得点の平均値を基準にして、学生の回答を高得点群99名と低得点群74名に分類集計し、各検査・調査の結果を比較するグラフを作成した。

3. 結 果

3.1 社会人基礎力(図1～2)

社会人基礎力は、上位概念の3つの能力とその下位概念の12の能力要素で構成されている。第1の能力は「前に踏み出す力」で「主体性」「働きかけ力」「実行力」から成る。第2の能力は「考え抜く力」で「課題発見力」「計画力」「創造力」から成る。第3の能力は「チームで働く力」で「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律

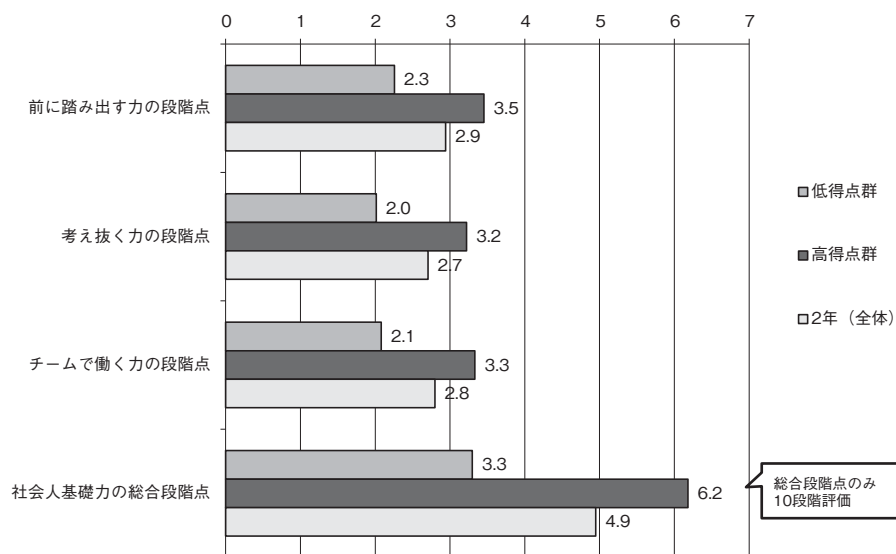


図 1. 上位の社会人基礎力の 5 段階評価

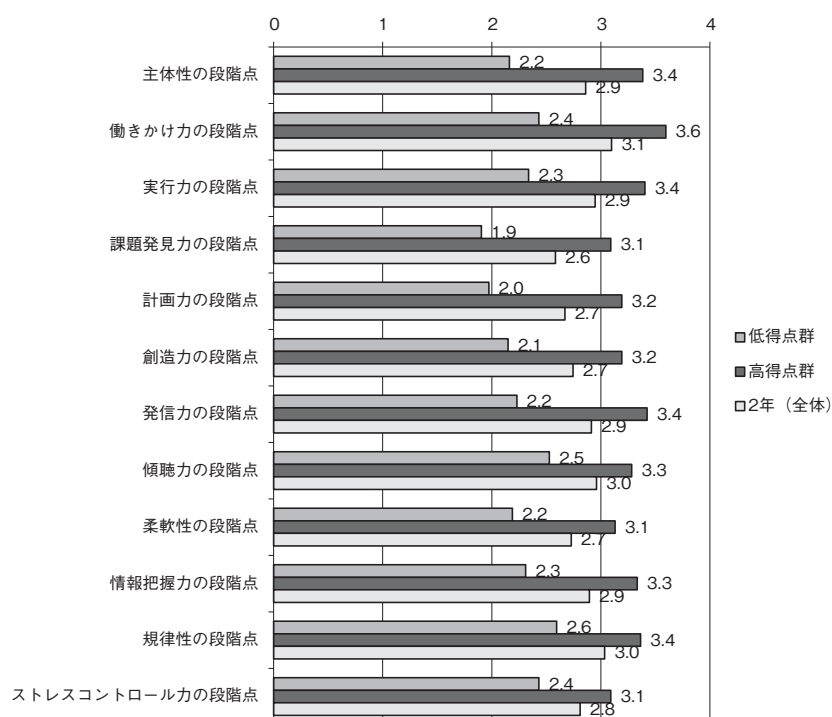


図 2. 下位の社会人基礎力の 5 段階評価

性」「ストレスコントロール力」から成る。

図 1 と図 2 は、社会人基礎力の総合得点の平均値を基準にして学生の回答を高得点群と低得点群に分類し、社会人基礎力の 3 つの上位能力と 12 の下位能力を群間で比較したグラフである。この図より、全ての能力において高得点群の社会人基礎力が低得点群より高いことが分かる。

3.2 基礎能力（図 3～4）

基礎能力は、上位概念の 3 つの能力とその下位概念の 6 つの能力で構成されている。第 1 の能力は「表現力」で「言葉」「表現」から成る。第 2 の能力は「遂行力」で「計算」「知覚」から成る。第 3 の能力は「思考力」で「空間」「推理」から成る。

図 3 と図 4 は、社会人基礎力の総合得点の平均値を基準にして学生の回答を高得点群と低得点群に分類し、基礎能力の 3 つの上位能力と 6 つの下

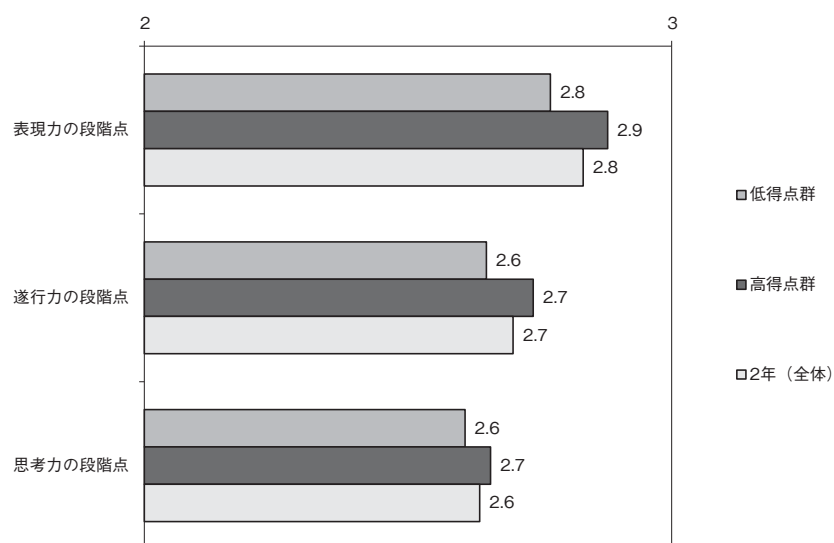


図3. 上位の基礎能力の5段階評価

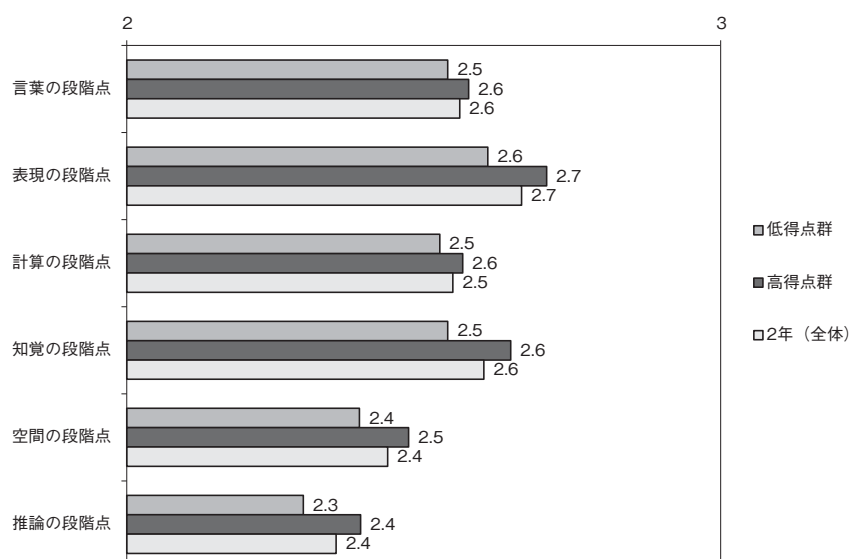


図4. 下位の基礎能力の5段階評価

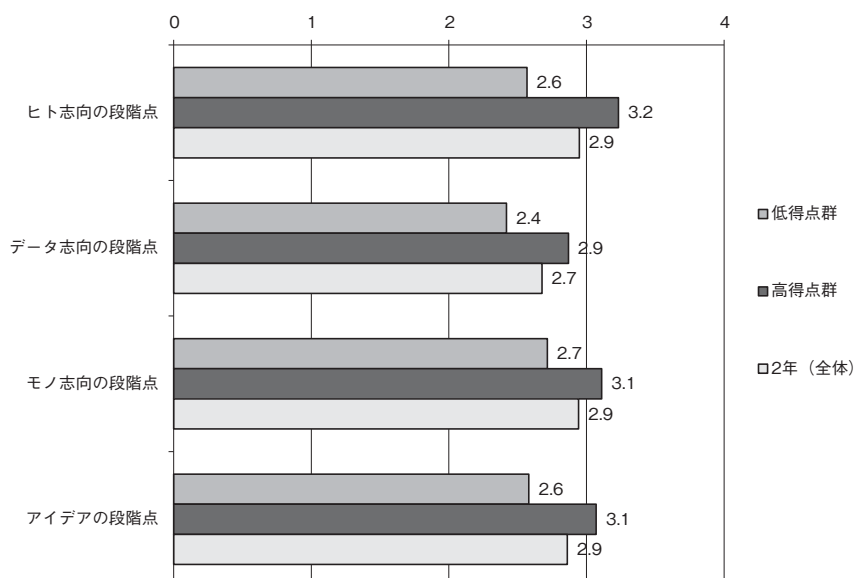


図5. 上位の職業興味の5段階評価

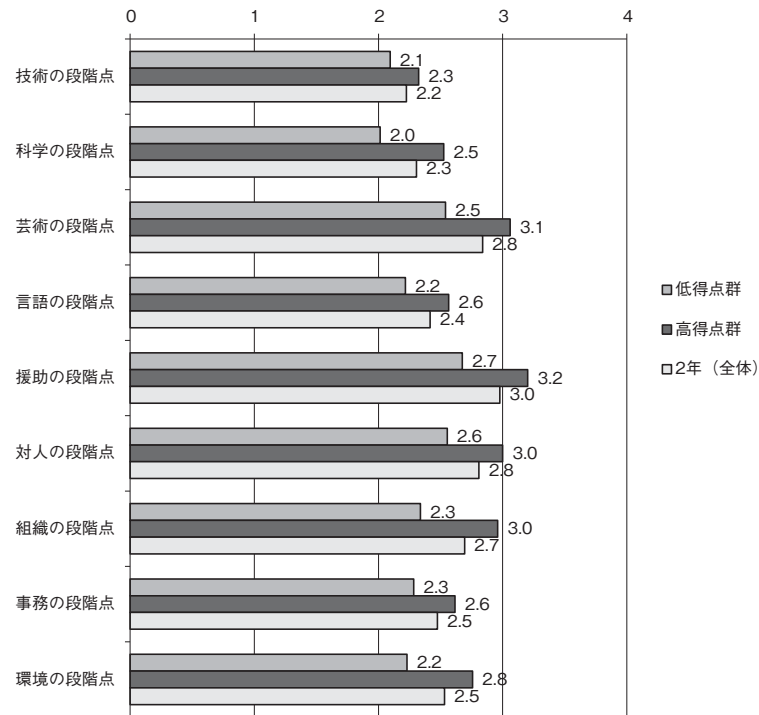


図 6. 下位の職業興味の 5 段階評価

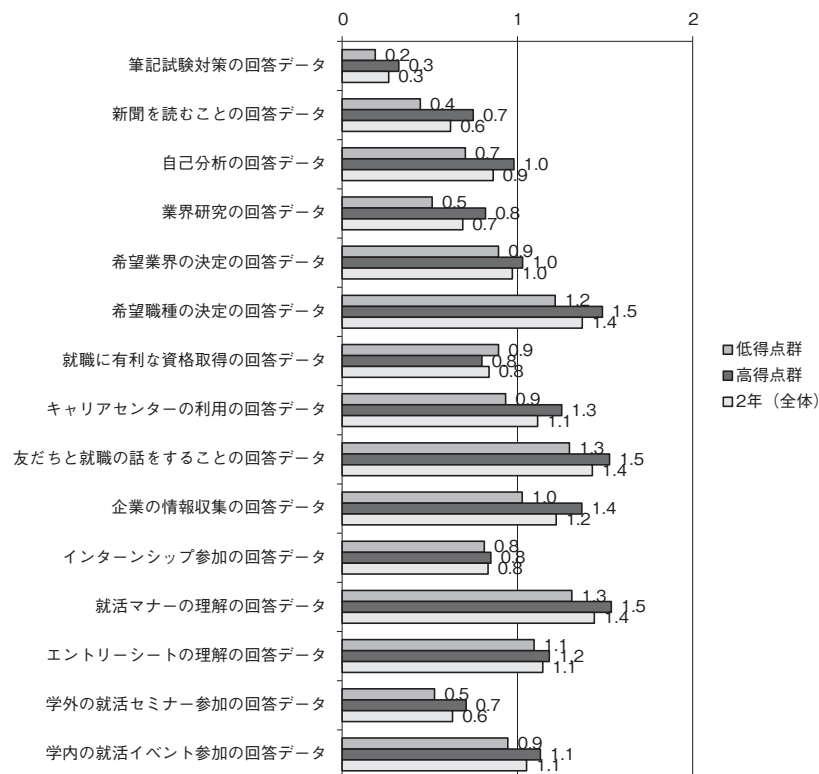


図 7. 就職活動の 3 段階評価

位能力を群間で比較したグラフである。この図より、全ての能力において高得点群の基礎能力が低得点群より高いことが分かる。

3.3 職業興味（図 5～6）

職業興味は、上位概念の 4 つの志向とその下位概念の 9 つの特性で構成されている。4 つの志向は「ヒト志向」「データ志向」「モノ志向」「アイデア志向」で、9 つの特性は「技術」「科学」「芸

術」「言語」「援助」「対人」「組織」「事務」「環境」である。

図5と図6は、社会人基礎力の総合得点の平均値を基準にして学生の回答を高得点群と低得点群に分類し、職業興味の4つの上位特性と9つの下位特性を群間で比較したグラフである。この図より、全ての特性において高得点群の基礎能力が低得点群より高いことが分かる。

3.4 就職活動（図7）

就職活動は、就職への取り組みとして重要な15の項目で、「筆記試験対策」「新聞を読むこと」「自己分析」「業界研究」「希望業界の決定」「希望職種の決定」「就職に有利な資格取得」「キャリアセンターの利用」「友だちと就職の話をする」「企業の情報収集」「インターンシップ参加」「就活マナーの理解」「エントリーシートの理解」「学外の就活セミナー参加」「学内の就活イベント参加」である。

図7は、社会人基礎力の総合得点の平均値を基準にして学生の回答を高得点群と低得点群に分類し、就職活動の15の項目を群間で比較したグラフである。この図より、ほぼ全ての項目において高得点群の基礎能力が低得点群より高いことが分

かる。

3.5 学修行動（図8～9）

学修行動調査の中の「1週間の学修時間」は「授業の出席の時間」「授業以外の勉強や宿題の時間」の2項目であり、「その他の学修行動」は「教科書以外に参考文献などを読む」「図書館を利用する」「インターネットを活用する」「授業の課題をきちんと提出する」「授業の予習・復習をする」の5項目である。

図8と図9は、社会人基礎力の総合得点の平均値を基準にして学生の回答を高得点群と低得点群に分類し、学修時間の2項目と学修行動の5項目を群間で比較したグラフである。この図より、全ての学修時間と学修行動において高得点群の基礎能力が低得点群より高いことが分かる。

以上のことから、社会人基礎力の能力が高い女子短大生は、基礎能力、職業興味、就職活動、学修行動に関するほぼ全ての能力や行動特性も高いことが示された。

4. ま と め

本稿は短大教育における汎用的能力の重要性を

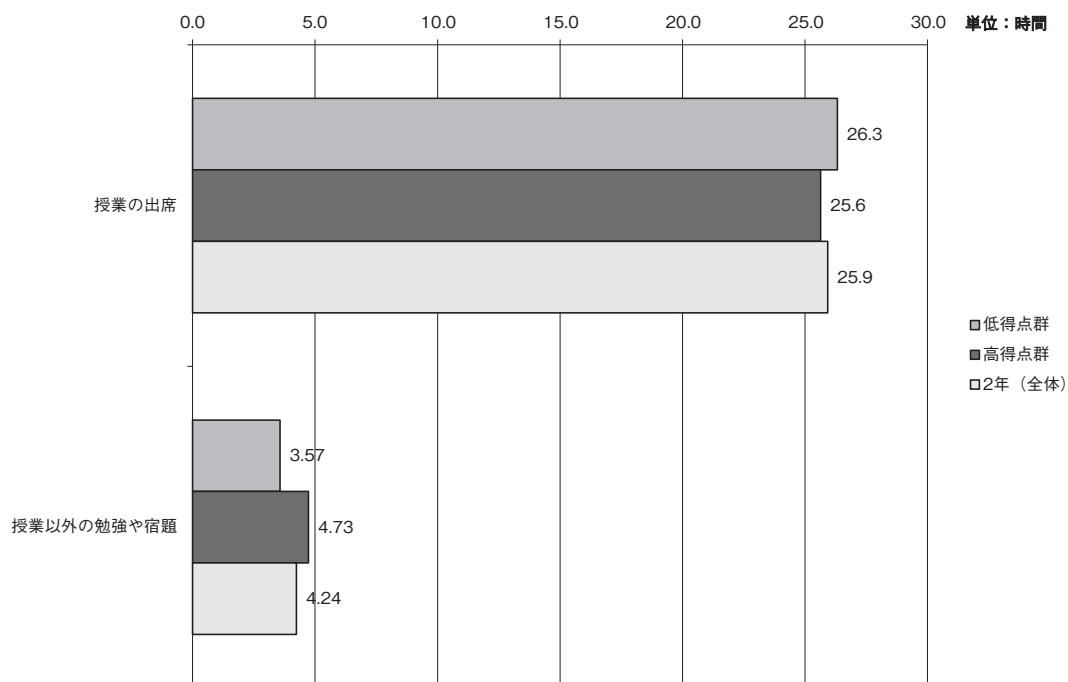


図8. 学修時間の1週間の合計時間

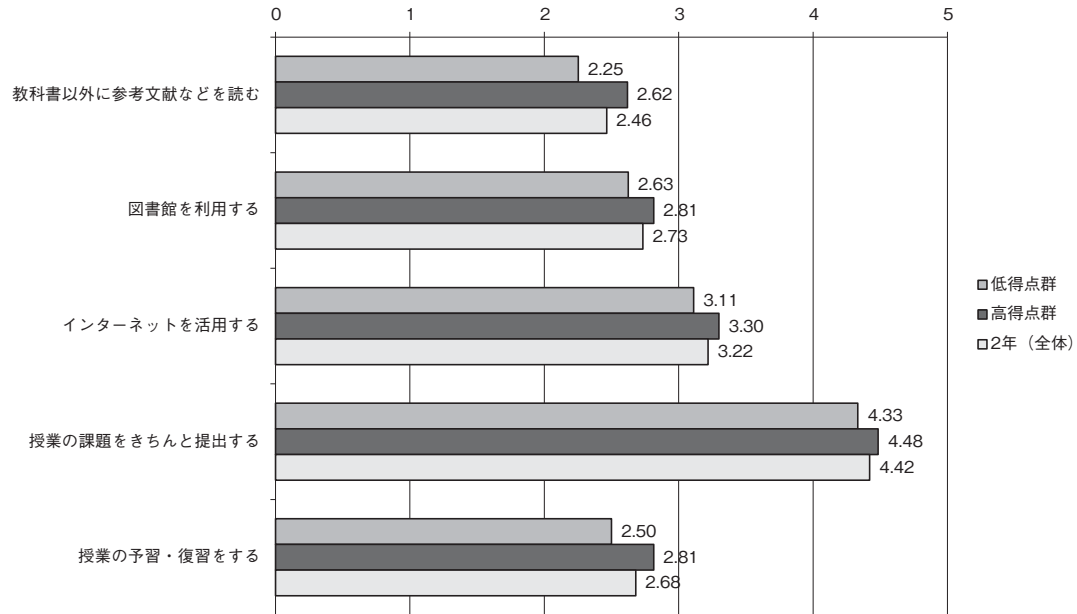


図 9．学修行動の 5 段階評価

検証するために、女子短大生の社会人基礎力と基礎能力、職業興味、就職活動、学修行動を測定し、社会人基礎力の能力差が他の能力等に与える影響について検討することを目的とした。その結果、社会人基礎力の能力が高い女子短大生は、基礎能力、職業興味、就職活動、学修行動に関するほぼ全ての能力や行動特性も高いことが示された。

文部科学省は2012年の中教審答申の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」²⁾において、次のように報告している。それは、「(前略) 大学が地域再生の拠点となるとともに、地域の未来を担う有為な人材の育成に責任を持つことが求められる。汎用的能力はこのような地域社会・経済を支える人材にとっても必要不可欠である。(中略) 学長・学部長アンケートによれば、学生の学修成果について、“専門的知識、技術・技能”“職業人としての倫理観”について学長・学部長は高い満足度を示しているが、成熟社会において重要な“獲得した知識等を活用し、新たな課題に適用し課題を解決する能力”や“汎用的能力”に関する満足度が相対的に低い。また、学修時間については、“授業に出席し受講する時間”に関しては高い満足度を示しているが、“事前の準備や事後の展開など授業外の学修時間”に関しては満足度が極めて低い。」というものである。

今後は、社会人基礎力などの汎用的能力と専門的能力の関係、及びアクティブラーニングのような能動的学習時間と受動的学修時間の関係を明確にし、女子短期大学のキャリア教育・職業教育における質保証のために、PDCA の改革サイクルの確立に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 中央教育審議会：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について、文部科学省中央教育審議会答申、(2011)
- 2) 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて、文部科学省中央教育審議会答申、(2012)
- 3) 中央教育審議会：3つのポリシーの策定及び運用に関するガイドライン、中央教育審議会大学分科会大学教育部会答申、(2016)

謝 辞

本稿に掲載した調査の実施及び結果の処理に際しては、短期大学コンソーシアム九州事務補佐員の田頭未幸さんに多大なるご支援とご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。